

# 発達障害のある子ども達が安心して暮らせる地域づくりに向けて

(特活) 自閉症ピアリングセンターここねっと 黒澤 哲  
(特活) せんだい杜の子ども劇場理事)

私の所属する「ここねっと」は仙台市から委託を受けて発達障害児者の支援に関する様々な事業を行っています。中でも相談支援事業を進めていく中で、子ども達やその家族を支援する上で大切にしたいことが見えてきました。今回はそのうちのいくつかをご紹介します。

まず支援が必要な子ども達に目を向けてみましょう。私たちは困っている彼らを目の当たりにした時、どうしても出来事そのものやその関わりだけに目を向けてしまいがちです。しかし、彼らを支えるには「予想される将来から今を考える」という視点が重要です。これは大人になった当事者の声をまとめたことからわかってきたことです。「学齢期には勉強より、生活に関する多くの経験をしておいたほうが良い」「趣味や習慣などで、自分が意欲を持って取り組めることを増やしておけると良い」など、小さい頃からずっと生き辛い経験をしてきた彼らの話に耳を傾けることで見えてきた、将来生活をしやすい大きなヒントなのです。彼らは生まれ持った特性ゆえに、実体験を通して学んだり経験したりする機会を逃しやすく、その影響から生活していく意欲自体も失われてしまったり、ということを示しています。私たちはその時の対応だけでなく、常に将来を見据えた関わりを考えていきたいものです。

次に保護者の方々の気持ちを考えてみましょう。周囲の人達は、本人の問題行動や親の対応ばかりに気を取られ、しばしば保護者の本当の想いを見過ごしていることがあるかもしれません。親御さんにとってグレーゾーン※という言葉を受け止めることは容易ではありません。ましてや本人の特性と行動を冷静に捉えられるようになるには、想像できないほど多くの時間と労力を要するのです。発達障害と出会った当初は「個性の範囲であってほしい」とこれまでの価値観や認識を改めることが難しく、「頭では理解できるが親としての感情が邪魔をする」状態であり、具体的に「どう本人と向き合えば良いのか」と常に手探りな状況で子育てを続けなければなりません。さらに「この先我が子はどんな人生を歩むのだろうか」と不安と隣り合わせの毎日を送ることになるのです。よって私た

ちは、子どもの対応を考える際、常に家族の本当の気持ちを理解しようとする姿勢で、温かく接していくことを忘れてはなりません。

また発達障害のあるお子さんやその家族の中には、学校を含めた身近な地域で周囲にうまく溶け込めないと感じている人が多くいます。「障害が知れたら孤立するのではないか」「協力をお願いできるはずがない」と思い込み、それが続くことで「信頼できる人がいない」という悪循環に陥っている事例が多く見られます。一方で地域の民生委員児童委員の方々からは「何とか力になりたい」「どうしたら遠慮なく相談してもらえるのか」など協力やお手伝いを申し出る声も聞かれています。しかし現時点では、具体的な方法やその度合いがわからず、接点が持ちにくくなっています。そのことを踏まえると、私たちは地域の一員として、発達障害に関して得た知識や情報を積極的に発信していくことが求められているのではないのでしょうか。些細なことの積み重ねで地域が変わり、彼らの生活の改善につながっていくのです。

現在、発達障害のある子ども達が置かれている環境は決して良いものとは言えません。しかし彼らが安心して暮らせる地域づくりのためのヒントをせん杜は持っています。「自分の肌で触れて感じる実体験」こそ、彼ら自身のコミュニケーションで最も重要な要素であり、「人間としての感性やお互いを認め合う心」は発達障害のある人もない人も、互いに支え合える地域づくりの理念であることに他なりません。つまりせん杜の活動とは、様々な人達が生きやすくなるための地域の基盤なのです。これらの活動を日々自信をもって進めていくことが、私たちせん杜の使命なのではないのでしょうか。



※グレーゾーンとは  
認知発達の特徴が多少なりとも認められ、コミュニケーションの中で独自の理解の仕方や考え方が見られること。医療的には診断を受けられるかどうか（特性があるかどうか）がはっきりしない状態を指す場合もある。